

Title	サクソン塔とその社会的背景
Sub Title	Saxon towers and their social background
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1960
Jtitle	哲學 No.38 (1960. 11) ,p.49- 78
JaLC DOI	
Abstract	It is said that there is hardly a house in England which is out of the hearing of the church bell. Indeed I may say, from one point of view, that each period of the history of England since the Anglo-Saxon days is illustrated by the church towers of the times, which have something to tell us about the people who built them. The story of the english church towers and of the people who erected them may reveal the social development of a nation which has evolved from many different races and absorbed much from different ways of life. It may reflect too the intrinsic nature of the English temperament and show the influences which moulded the national character as well as the elements from which it has sprung. Entertaining these views, I tried in these papers, as the first part of my socio-historical study of the English church towers, to explain: (1) Christianity of Roman-Britons and Anglo-Saxons, (2) Churches in the Saxon period, (3) Saxon architecture and its styles, (4) Usages and characteristics of Saxon towers. Driven by the Germanic invaders, the Roman-British Christianity was pushed to the west and north, there coming closer contact than before with the Celtic Christianity, and gradually solidifying itself into a Christian system which had its center at a point as far away from the shadow of the Saxon invasion. Towards the end of the 6th century, the Saxons themselves began to adopt Christianity and then to erect their churches. The name of the Saxon architecture was given to the style of buildings supposed to have been erected by the English in England before the Norman Conquest. The earliest Saxon buildings were crude combinations of ideas partly their own and partly Roman-British. From this the Saxons gradually passed to a style which was afterwards called the Saxon architecture, combining the influences of the roman, gaulish, and celtic traditions. This Xaxon character of its own marked almost whole of the period of nearly five centuries over which it extended.
Notes	横山松三郎先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000038-0056">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000038-0056</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# サクソン塔とその社会的背景

佐原 六郎

## 一、ローマ・ブリトン人とアングロ・サクソン人のキリスト教

イギリス人のブリテン島占拠は、<sup>(1)</sup>西紀四四九年頃にはじまつたと見てよいと思うが、当時のブリテンはローマ帝国の一属州であつた。いわゆる「イギリス人の到来」というときのイギリス人はアングロ・サクソン及びジュートのゲルマン系三民族のいずれか一つ、またはその混合を指すのであつて、彼等の区別も後世に於ける著しい融合の事実から見て実際には頗る困難である。イギリス人の始源とその初期の区分については<sup>(2)</sup>ビード(六七三—七三五)の記述以来今日に至るまで多くの学者によつて論議されているが、私はそれらの論議を念頭に置いて、本論考でイギリス人、アングロ・サクソン人、又は単にサクソン人と書く場合、それら三種の言葉を厳密に区別することなく、互に重複又は交叉した意味のものとして扱うつもりである。

三世紀の半ば以降、既にローマ帝国解体の兆は現われはじめていた。当時ローマの一属州であつたブリテンに於ても南方からはサクソン人の侵略が開始され、また四世紀に入ると北方からケルト人が屢々攻略を行うようになり、この島は全く不安動揺の状態に置かれることになつた。そして四一〇年には西ローマ皇帝ホノリウスによつてブリテン援助を目的とするローマ軍派遣の中止が宣言されてローマのブリテン支配は遂にその終局を告げるに至つた。しかし

ブリテンに於けるローマ風の都会とそこに住む上層階級者の奢侈的生活とはそれ以前既に破綻に向つていた。すなわち一方では都会人口の減少、建物の荒廃の兆があり、他方では三六八年及びそれ以後屢々行われたサクソン人の侵略によつていわゆる田園住宅<sup>3</sup>の多くが崩解に帰してしまつた。かくて中央集権的、都会中心のローマ式行政は打破され、各都会を結ぶローマ式道路体系も、少数の例外を除き、不要なものとして放棄されるに至つた。

初期のアングロ・サクソン人は人口の集中を必要とするような経済体制をもつていなかったで、未だ都会生活を知らず、たゞ自然を愛し、田舎に住むことをのみ好んだ。かれらは木造、または木摺と壁土の建物にのみ慣れ、荒廃のまゝ放置されていた石造建築、舗装道路、重厚な城壁などのローマ文明の名残りに接しても、これを如何に修復するか<sup>4</sup>の術を知らず「諸々の都会は遠方からも見える。それは巨人の巧妙な仕業であり、地上に於けるいとも不思議な石造防衛工事である」との考えを抱いたに過ぎなかつたという。従つて彼等自身進んでブリトン人を雇ひ石又は煉瓦の建築に奉仕させることもなかつたらしい。他方彼等がキリスト教に改宗する以前にいかなる宗教を信じ、いかなる神殿を建てたかは殆んどこれを知ることができない。それはその後のキリスト教会がこの問題に触れ、それを論議することを奨励しなかつたことと、イングランドに異教時代のアングロ・サクソンの神殿と思われるような遺跡が未だ一つも発見されていないことにもよるとされている。

それならばアングロ・サクソン人の先住民族であり、彼等によつて征服された諸地域に残留した相当数のブリトン人の宗教はどうであつたろうか。四世紀頃のローマ支配下のブリテンでは、未だ圧倒的勢力はなかつたが、ともかくキリスト教がかなり普及し、相当に根を張つていた。そしてローマとの政治的、軍事的関係の断たれる以前にキリスト教はブリテンの公認宗教となつていた。けれどもやがてキリスト教はゲルマン系諸族の相つぐ侵略のため一頓挫を

きたし、彼等の征服地ではもちろん、事情の最もよく、従つて当然残存しうるものと思われたケント王国に於てさえ殆んど亡びてしまつた。それはなぜであらうか。この疑問については宗教と階級との關係が説明の鍵となる。元來ローマ・ブリテンのキリスト教は都會と田園邸宅<sup>グレイ</sup>の住民、すなわちローマ化された階級の人々によつて信奉され、多数の農民社会には浸透していなかつた。しかもそのキリスト教は大陸の国々の場合と同様に、都會とそこに本拠を置く僧正とを中心として栄えたものであるが、サクソン人のブリテン侵入は既述のように都會と田園邸宅との終焉を意味し、またローマ化された階級の殘党はこれと共に亡びたか、或は侵入者の勢力の及ばない西又は北の方に逃げ去つてしまつた。そして後に残つた下層及び貧困の農民の大部分は未だキリスト教化されていなかつたのである。その上これら下層のブリトン人は古代の神話の宗教を信奉していたわけでもない。なぜならばそのような宗教の神々もまた彼等がはじめから与りしらなかつた上層階級の人々の祭式に關係のあるものであつたからである。

イギリス人の到来以後もブリテンの既存キリスト教会はウエールズ、デヴオン、コーンウォール、ストラスカイ<sup>5</sup>ド、ウェスト・ライディングなど侵略者の勢力の及ばない西方及び北方の諸地域に余命を保つていた。ビードは先住のブリトン人が侵入者を憎んでこれを改宗させる運動を行わなかつたと非難し、かつブリトン人のその後の不幸も結局神罰によると見做したが、しかしサマーセットに於ける教会堂の献納は伝道事業がある程度ウエールズの僧侶達によつてプリストル海峡を越えた地域にまで及んでいたことを示している。五九七年にはオーガステインを中心とする約四〇人の修道僧がケント王国に到着したが彼等の熱誠と皇后ベルタ（フランク王国の王女でキリスト教徒）の影響によりエセルバート王（<sup>五五二頃</sup><sub>一六二六</sub>）も遂に洗礼を受け、オーガステインにカンタベリーの管轄権を与えた。かくてイギリス人の改宗の過程はその初期に於てかなりめざましいものがあつたが、その後東アングリアのレドワルド王を改宗

させようとしたエセルバート王の企図が失敗したり、更にハンバー河以南のすべての地域を領する大君主であつたこのケント国王が死亡（六一六年）したためキリスト教に不利な反動が起り、殊にエセックスの如きは約四〇年間も異教に復帰したままであつたという。かくてイングランドのキリスト教化は決して順調に進んだのではなく、長い年月と多くの支障の克服とを経て徐々に効果を挙げたものである。しかしこの間にあつて北方のケルト人の住む諸地域では聖パトリク、聖コランバその他のブリトン（ケルト）系の優れた伝道者が輩出して南方ブリテンのローマ教会とは無関係に独自の教会を発達させていた。そしてこのケルト教会こそはエセックスその他のアングロ・サクソンの諸地方のキリスト教復興に大きな貢献をすると共に教会の組織や慣行から更に建築のプランの上にまでローマ教会のものとは異つた特徴を発揮するに至つたのである。

ローマ及びケルトの両教会の間にはイースターの日の定め方とか、僧侶の剃髪仕方などにさえ差異があつたが、それよりも特に注目しなければならないのは両教会の組織上の差である。すなわちケルト教会は未だ都会の発達をみない地方に結成されたのでローマ教会の場合のように管区としての地域を支配する都会的僧正に基礎を置くことはなかつた。ケルト教会の中心は一種の独立単位としての修道院であつて、それは管区によつて制限されることがなかつた。ローマ教会は法皇を頂点とする権威の階統をなして高度に組織化されていたが、ケルト教会はそのような中心組織のない分散的存在の傾向が強かつた。もちろんケルト教会にも僧正は存在したが、それはたゞ僧侶を任命する必要に基いて作られたもので、それ以外に何の機能も権威もなく、中には修道院長や、時には婦人修道院長の下で共同生活を営むような僧正も見出されるのであつた。従つて修道院そのものと、修道院生活についての考え方もローマとケルトでは著しく喰ひ違つていた。例えば五二八年にローマでは聖ベネディクト（四八〇頃）（一五四三）によつて制定されたベネ

ディクト会則 (*regula monachorum*) に従つて、修道僧は労働と祈禱の時間によつて制約された軍國的封鎖生活、合理的な支給以外の衣食の禁止、権威への絶対服従などを守らなければならなくなつた。修道僧はすべて同じ宿舎に起居を共にし、同じ食堂で食事を取り、外の世界から全く隔離された日常を送るようになった。これに反してケルトの修道院ではそれぞれ自由に定められた会則があり、修道僧は各自の庵室で個別的な生活を営み、また修道院によつては婦人修道僧をも収容していた。しかも彼等は自由に遠方の修業者を訪ねたり、或は異教徒の間に入り込んで放浪しつゝ説教に従事するような場合も多かつた。その外窮乏と受難の禁欲生活を送り、自ら苛烈な修業に努めることが彼等にとつて当然の行動であつた。かくて彼等の集團組織そのものは決して強固ではなく、むしろゆるやかなものであり、また彼等各自の行動はそれぞれ風変わりなものと見られたけれども、神の栄光のために捧げる彼等の熱烈な努力には民衆を動かす強い作用が潜んでいた。それ故彼等は、セルマンの述べたように、立派な組織者ではなかつたとしても、一流の伝道者としての資格をそなえ、有力者には学識を、貧乏人には自己の簡素な耐乏生活を、またその両者には自己の聖者的行動を以てそれぞれ深い感銘を与えたのである。ケルト教会の修道僧は危険を恐れず、不快を顧慮することなく、勝手に誰れとでも面談し、聖霊に導かれるまゝどこへでも行くという有様であつた。アングロ・サクソンの教会、殊に教区教会の発達にはこのような初期のケルト教会の影響がかなり強く働き、また壮大な本寺よりもむしろ簡素で自由な教区教会を誇りとするイギリス人の性格にも同様の影響が及んでいるのではないかと思われる。

註(1) *The Anglo-Saxon Chronicle*, tr. by G. N. Garmonsway, 1953. p. 13.

(2) *Bede's ecclesiastical history of the English nation*; tr. by John Stevens and revised by L. C. Jane, 1954. p. 22 f.

(3) ローマ時代のブリテンに於て不動産と見られ、所有者のみならず、雇人達にとつても宿舎としての設備のあつた自給自足の農舎。今日遺跡によつてその存在の明かにされたウィラは少くとも五〇〇あり、五世紀には数千あつたらしい。

- (4) Whitlock, D., *The beginnings of English society (the Anglo-Saxon period)*, 1952. p. 16.
- (5) Bede, *op. cit.*, p. 32.
- (9) Selman, R. R., *The Anglo-Saxons*, 1959. p. 43 f.

## 二、アングロ・サクソン時代の教会

アングロ・サクソン人に対する最初のキリスト教伝道者たちはこの島が多くの国々に分れていることを発見したが、やがてそれらの国々はいわゆる七王国<sup>ヘプタキヤ</sup>に統合された。しかもこれら七王国のうちキリスト教に改宗した国王は何れも初代の僧正となつた伝道者に宣教上の特権を与え、また国境をそのまゝ僧正管区の境界として認めた。例えばカクタベリ本寺と、その一分派のロチェスター本寺とはケント王国を、セルシー本寺はサセックス国の全域を、更にダウウィッチ本寺は東アングリア国をそれぞれの僧正管区とした。

以上のように僧正管区は一応古く定められたが、その後これらの管区を無視したサクソン人は当時余り重要ではない地域に僧正の管轄権を与えたりしたので、「<sup>1</sup>サクソン人がローマ式の都会に対して何を為し、何をなさなかつたかは別として彼等はそれらの都会を宗教上の制度と全く関係のないものにしてしまった」とさえ云われるようになったのである。そして諸本寺の分布が大体一定するに至つたのはノルマン征服（一〇六六）以後のことである。もちろん現存本寺のかなり多くはサクソン時代からの敷地をそのまゝ保持しているが、現存の建築は何れも後世のものでサクソン時代そのまゝの本寺は一つもない。それは征服後間もなく確立されたノルマン政府が既存の諸本寺を一掃し、そのあとに精神生活に対する彼等の貢献を誇示しうる、もつと壮大な教会を建築する政策をとつたからである。たゞ著し

い例外としてヨークシャーのリボン本寺の玄室<sup>クリプト</sup>（六七〇年頃）と、ノーサンバーランドのヘクサム本寺の玄室（六八一  
年頃）とがそれぞれ現存寺院の地下室としてサクソン時代そのまゝの姿をとどめていこることを忘れてはならない。

次に教区教会としてはサクソン時代の古建築がかなり多く遺存している。<sup>(2)</sup> ホッジキンは「第八世紀及びその前後の  
時代に教会のなかで目立つことなく行われていた最も重大な発達は恐らく教区制度の漸次的形成であつたろう」と述  
べたが、この制度は初期の本寺を中心として外へ向つて放射的に進められた伝道事業の発展に伴つて作られたもので  
ある。それはまた地主階級の人々が彼等の仲間のためか、彼等の所有地内に定住して教会建設の土地や資材を提供する  
ように説得した僧侶の一团のためか、或は彼等及びその他の人々の靈魂の救いのために設立した教会に起因している  
とも云われる。<sup>(3)</sup> D・M・ステントン夫人によると初期の伝道時代に於ける教会の多くは国王又は僧正によつて建設され、  
そこではその地方の住民を改宗させ、これに奉仕することを義務とした僧侶達を宿泊させていた。そしてこれらの僧  
侶は一つの集団としての共同生活を営んでいたので、教会は屢々修道院教会<sup>リンスター</sup>（後述の旧修道院教会に相当する）と呼  
ばれた。しかもこれらの古い修道院教会は修道僧や托鉢僧ではなく、むしろ普通の僧侶によつて奉仕された伝道のた  
めの教会で、それが自然に後の教区教会へと転化したのである。かくて<sup>(4)</sup> F・M・ステントンは後期古代イギリス法に  
よつて認められた教会の分類を用いて教区教会の由来を次の如く説明した。すなわちサクソン時代の教会には（一）首位  
修道院教会（the head minster）、これは本寺（cathedral）とも云う、（二）普通修道院教会（the ordinary minster）（三）  
墓地附小教会（the lesser church with a graveyard）（四）野外教会（the field church）の四種があつた。このうち（一）  
は僧正の座席（cathedra）をそなえ、他の一切の教会から独立した最高の教会である。（二）は旧修道院教会（the old  
minster）とも呼ばれ、中世紀の文書のうちで母教会（matrix ecclesia）と称せられたものに相当する。そしてこの

母教会の最初の管区内に(三)の墓地附小教会が、国王や僧正によつてではなく、世俗の地主的貴族によつて、設立された。これがいわゆる教区教会の大部分となつたもので、その僧侶は屢々母教会の教区長に年金を支払う義務を課せられることもあつた。またこの種の教区教会は教区民から墓地使用料をとつて収入の一部としていた。他方設立者はその教会を私有財産と見做し、自分ばかりではなく、子孫にとつても一種の収入源であるが如くに考えていた。最後に(四)の野外教会というのは新しく開墾された土地、従つて(三)の教区教会の礼拝に出席するには余りに遠い地域に住む人々のために設けられたもので、教会というよりはむしろ一つの礼拝所<sup>チャペル</sup>に過ぎず、場合によつては単に路傍に立てられた十字型石標<sup>スタンディングクロス</sup>を以て農民のための野外礼拝の場所を示すにとどまることもあつた。

以上四種の教会のうち(一)と(三)がそれぞれ教区教会と称されるようになったのであつて、中世初期の教区教会のうち大規模なものは旧修道院教会から、またその他の大部分の教区教会はサクソン時代の墓地附小教会に由来するものであつた。もちろん、教区という言葉はかなり古くから使用され<sup>(6)</sup>例えば七世紀には既に一つの地方を指す単位としての教区(parrochia)の概念がスコットランドの聖カスバートの伝記中に現われているという。何れにしてもイギリス村落社会の宗教生活が、そこに在住する僧侶によつて奉仕される一つの教会を中心として営まれ、そこにいわゆる教区教会が発達してきたのは極めて長い年月にわたる遅々たる歩みの結果であつたというべきである。

- 註(一) Armstrong, Sir Walter, *Art in Great Britain and Ireland*, 1909. p. 17.  
 (二) Hodgkin, R.H. *A history of the Anglo-Saxons*, 1935. Vol. II. p. 425.  
 (三) Stenton, Doris Mary, *English society in the early Middle Ages*, 2nd. ed. 1952. p.204f.  
 (四) Stenton, F.M., *Anglo-Saxon England*, 2nd. ed. 1947. p.148.  
 (五) the late Old English Law これはイングランド王エセルレッド二世(九七八—一〇一六)の制定した法律  
 (六) Stenton, F.M., op. cit., p. 148.

### 三、サクソン建築とその様式

イギリスの古代中世の建築の時代分けについては既に幾つかの方式が提唱され、その何れに従うかは人により、又学派によつて必ずしも同じではない。<sup>(2)</sup> 古くは四四九—一〇六六年の建築をアングロ・サクソン式、一〇六六—一一八九年のそれをノルマン式と名づけていたが、その年代について異論を唱え、七世紀—一〇五〇年をサクソン建築、一〇五〇—一一九〇年をノルマン建築と見なしたり、或はまた五九〇—一一〇〇年をサクソン式、一〇六〇—一一〇〇年を初期ノルマン式、一一〇〇—一一四五年を後期ノルマン式というように年代の重り合いを認めるものもある。最近ではまたサクソンとかノルマンとかの名を捨てて<sup>(5)</sup> 征服前ロマネスクと征服後ロマネスクという表現を以てこれに代えることの妥当性を説く学者もある。けれどもこゝではこれらの時代分けの問題には入らず、五九〇—一一〇〇年頃の建築をサクソン式と見做す立場をとつて、その頃の教会、特に塔の建築についてのみ論述することとする。

英国に於て明かにキリスト教の建築であると証明された最古のものは一八九〇年以來の組織的発掘によつて発見された<sup>(6)</sup> シルチェスターの教会趾である。これは幅二七呎、長さ四二呎のバジリカ風教会の土台であつて恐らく四世紀頃のものと推定されている。ローマ・ブリテン時代の教会としてはわずかにこの教会趾しか残っていないが、更にローマ軍撤退の四一〇年からオーガスチンのケント国への到着の五九七年までの間に於てもサクソン人の建立と確認された建築又は遺跡は一つも見出されていない。従つていわゆるサクソン建築の年代も七世紀から九世紀に至る前期と一〇世紀初期から一〇六六年のノルマン征服に至る後期に大別されるのが普通である。しかもこのうち八、九の兩世紀にはデーン人による教会や修道院の破壊が甚しかつたのでその頃のサクソン建築のうち今日まで遺存するものは甚だ少

い。

もちろんサクソン建築と云つてもそれは決して他に類例のない独自のものではない。最初期のものは半ばサクソン人自身の、また半ばローマ・ブリテン人の、それぞれの趣向の粗雑な結合であつたが、サクソン人はこの状態から漸次に脱してブリテン及びゲルマンの伝統と、更に大陸、殊にアルプス以北のゴールに発達していた建築との影響によつていわゆるサクソン様式なるものを作り上げたのである。一般に主張されている所によるとサクソンの石造建築はその前時代の木造建築から多くの影響を受けたものとされている。なるほどサクソン人が木造家屋に住み、更に当時豊富に存在した木材を比較的に大きい重要な建物にも利用したことはいうまでもない。けれども彼等のイングリランドへの到来以前及び到来当時にこの島で石材使用の伝統が既に存在していた事は多くの実例によつて証明されている。従つて例えばアールズ・バートン、バーナック、バートン・オン・ハンバーなどに遺存するサクソンの石造塔に木材建築的な手法が窺われ、木造建築の感化が示されているからと云つて、それ以前の相当長期に亘る石造建築（幼稚なものではあつたが）の持続を否定するわけにはいかない。

さて既述の如くサクソン建築には前期と後期が区別される。そしてこの両期の建築にはアームストロングの指摘したように次の如き相違が窺われる。即ち前期では(1)設計の地味、(2)壁面の単調、(3)一般の構造が箱のような形を示していること、(4)装飾にローマ・ブリテン形式のものを採用したり、或は実際にローマ・ブリテン建築の残骸から取つてきた材料で装飾したことなどが認められている。次に後期になると(1)前期に比べて余程優雅の度が増す傾向の存すること。(2)充実した部分と空虚な部分とが相互によりよき関係をなしている。(3)高さと幅との比例がもつと快適である。(4)前期では屢々建築上危険な部分を重厚にするというローマ的充実性の尊重が見られたが、後期ではそのような

顧慮が著しく失われている。

古代イギリス教会にローマ的のものとケルト的のものが存在したことは先に述べたが、それに連関してサクソン教会の建築に次の三様式を分けることもできる。<sup>(8)</sup>ハットンによればこれらの様式は何れもデーン人侵入以前、即ち七乃至九世紀のサクソン前期に於て最も明かに認められるものである。

(1) 南方様式——これはオーガスチンその他のローマから派遣された宣教師の指令に基いて建てられたイタリーの影響の著しい教会である。その特徴は側廊<sup>アイルズ</sup>、西側の入口<sup>ポータル</sup>、半円形に張出した東端の後陣<sup>アプス</sup>などをもつ古典的なバジリカ風の様式にある。現存の実例としてはウイング<sup>(9)</sup>、ブリクスワース<sup>(10)</sup>、ワースなどの教会が挙げられる。

(2) 北方様式——これは主としてゴール地方の影響をうけ、ケルト人宣教師たちの指令に基いて建てられたものである。ダラムのエスカム<sup>(12)</sup>に遺存する福音者聖ヨハネ教会はその典型の一つである。これは小さな方形内陣<sup>チャンセル</sup>と高く細長い外陣<sup>ネーフ</sup>とを、大小二個の箱を縦に並べたように、連結した二室制の簡単な構造を示している。<sup>(13)</sup>ウエップによるとこれはケルトの伝統的木造建築のプランを踏襲したものだといふ。なおこれに類したものとしてフリーモア<sup>(14)</sup>及びブラッドフォード・オン・エーボンに現存するサクソン教会が挙げられる。

(3) 中間様式——これはハンバー河からテムズ河に及ぶアングロサクソンの古王国マーシャに栄えた建築で、南北両様式の混合である。しかもそれはデーン人、バイキング及びノースメンなどの相次ぐ侵略になやまされたイギリスの暗黒時代の影にかくされた非凡な多様性と独創力の生み出した様式とも見做されている。<sup>(16)</sup>ランフォードの聖マタイ教会<sup>(17)</sup>(これは一一世紀初期のサクソン建築を部分的に残しているに過ぎない) アールズ・バートン<sup>(18)</sup>及びバーナックの両塔の如きはこの中間様式の適例である。これらの教会又は塔に見られる独特の細線壁柱(pilaster strips)、や手摺子

式短柱 (baluster-shafts) 或は内部にある大きなアーチなどは何れもよくイギリス人の強靱な質実性を表現したものと云われている。

註(1) 石丸重治、英国本寺考(昭二八)六七頁以下にレサビー、デッチフィールド、ブッデューエンその他の学者の区分が比較論評されている。

- (2) Fletcher, B., A history of architecture on the comparative method. 9th. ed. 1931. p. 347.
- (3) Hutton, G. and Smith, E., English parish churches, 1957. p. 68.
- (4) Gardner, A.H., Outline of English architecture, 3rd. ed. 1949. p. 115.
- (5) Briggs, M.S., Everyman's concise encyclopaedia of architecture, 1959. p. 121.
- (6) Silchester, Northamptonshire の 聖 コーネリア Callava Artrebatum と 聖
- (7) Armstrong, op. cit. p. 19.
- (8) Hutton and Smith, op. cit. p. 11.
- (9) All Saints, Wing, Buckinghamshire.
- (10) All Saints, Brixworth, Northamptonshire.
- (11) St. Nicholas, Worth, Sussex.
- (12) St. John the Evangelist, Escomb, Durham.
- (13) Webb, G., Architecture in Britain, the Middle Ages, 1956. p. 4f
- (14) St. Mary, Breamore, Essex.
- (15) St. Laurence, Bradford-on-Avon, Wiltshire.
- (16) St. Matthew, Langford, Oxfordshire.
- (17) All Saints, Earl's Barton, Northamptonshire
- (18) St. John the Baptist, Barnack, Northamptonshire

## 四、サクソン塔の用途と特徴

塔は、特に寺院の塔である限り、附屬的存在であり、従つて常に補助的要素をなしているに過ぎない。けれども造塔が常に崇高なものを求める一種の宗教心と結びついているのも事実であつて、このような欲求、即ち高く垂直なるものに対する憧れこそはやがてロマネスクからゴシックに及ぶ多くの高塔を教会の象徴として建立させたのである。七世紀乃至十一世紀に建設されたサクソン塔が今でこそいかにも低く、ずんぐりしているように見えるとしても、それらの初建時代にはやはり人々の高さへの憧れを十分に満たした頼母しい存在であつたに違いない。また教会に対して補助的要素に過ぎなかつたからと云つて塔を輕視する風があつたわけではない。むしろ塔は教会堂以上に宗教の崇高性を表現するものとして親しまれていた。

元來塔の最も古いものは有事の際に於ける防備施設として実用的価値をそなえていた。事實古代ローマの後期には早くもシリアの諸教会に防備用の塔が設けられ、またローマでも北方蛮人の來襲と、頻発する地方戦争とはこのような塔の存在を有意義たらしめた。それは当時の教会建築がその大きさ及び貴重の度に於て最も高く評價され、防備の必要が痛感されていたからである。同じことはサクソン塔についても云える。恐らく初期のサクソン塔はその美感和宗教性より一朝有事の際の避難所、教会の聖器その他の貴重品を隠すための宝庫としての意味をもつていた。入口の高さや窓の配置及び大きさ、その他の構造からみてもこの事は明かであつて、<sup>1)</sup>アイルランドの円塔の場合と同様に、教会の塔は何れも当時の民族移動とそれに伴う武力抗争及び社会不安を反映していた。サクソン塔にはまた防備に連関して望楼としての役目もあつたらしい。それ以外に高い建造物のない時代のことであるからサクソン塔はその

最上階からの見張りによつて外敵の襲来を一早く発見するのに最も有利であつたに違いない。英語には、*beltry* といふ言葉がある。それは今日一般に鐘塔を意味している。けれどもこの言葉の語原である中世英語の *bertry*、古代フランス語の *berroi*、低ラテン語の *bertridus* は何れも皆見張りの塔（望楼）のことで、鐘には全く関係がなかつた。恐らくサクソン塔にもこのような古い意味でのベルフライの機能が小さくとも部分的に認められていたのであろう。

外陣と翼廊との交叉点の上に立てる中央塔（ブリーモアの聖マリア教会に木造中央塔の遺構が見られるが）はサクソン建築ではむしろ稀であつた。そのため教会内への採光を目的とすることはサクソン塔には殆どなかつた。けれども塔そのものの内部への採光と、次に述べるように鐘の響きをできるだけ遠く四方にとどかせるに適した広さの窓を最上階に開くことはサクソン塔にも必要であつた。現存サクソン塔の下層部に比較的小さい窓が配置されているに拘らず、独り最上階に於てのみ広い大きな窓の開かれているのは以上二つの用途があつたためである。

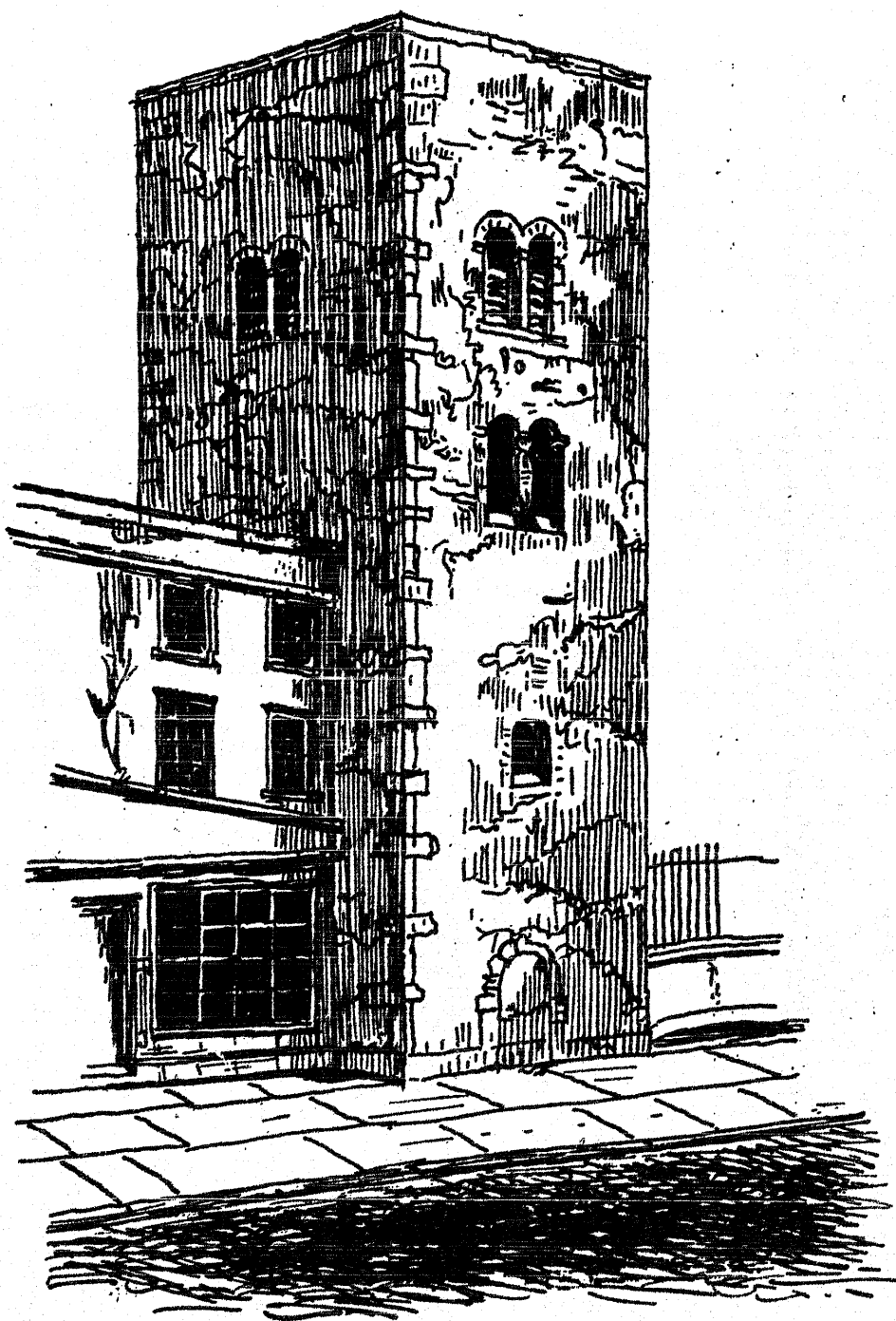
イギリスの教会塔に於ていつ頃から鐘が使用されるようになったかは明かでない。<sup>(2)</sup> クェンネルも述べたように、聖ヒルダ（ワイトビーの婦人修道院長）の昇天（六八〇年）した夜、一人の修道女が「常に人々を目さめさせ、祈禱に誘う衆知の鐘が突然空に響き渡るのを聞いた」と語つたというビートの記事は、七世紀の後半に鐘が教会で使用されていたことを明らかに示している。エクレスフィールドの教区牧師ガティもビードを引用して同様のことを述べ更に

一〇世紀にカンタベリー大僧正の聖ダンスタンがイギリスの諸教会に非常に多くの鐘を吊させたので、それ以後鐘は別にとりたてゝ問題にするほどのものではなくなつたと書いている。またイギリスの塔と鐘の熱心な研究家であるモリスによると第六代の修道院長（九四六—九七六）ターケティはクロイドランド修道院のために一つの巨大な鐘を鑄造させたとのことである。従つてこれらの事実から考えても現存の一〇、一一世紀のサクソン塔が防備、見張り、その他の

用途よりはむしろ鐘塔としての目的を果すために建てられたことは疑いのない所だと思う。次にサクソン塔の主な特徴を挙げることにするが、それは現存の一〇、一一世紀初建の塔の外観について窺われるものに限定する。

(一) 施行の粗野——サクソン塔は一般にその施工が粗野で、壁には野石又は粗石をそのまゝ積み重ね、また多くの場合その外側は塗喰で固めてある。

(二) 長短積——塔の外角その他の個所で長方形の隅石を縦横交互に重ねる長短積(long and short work)がしばしば見られる。第一図に示したオクスフォードの聖マイクル教会の塔、その他多くのサクソン塔によい実例



第一図 オクスフォードの聖マイクルの塔

が残っている。

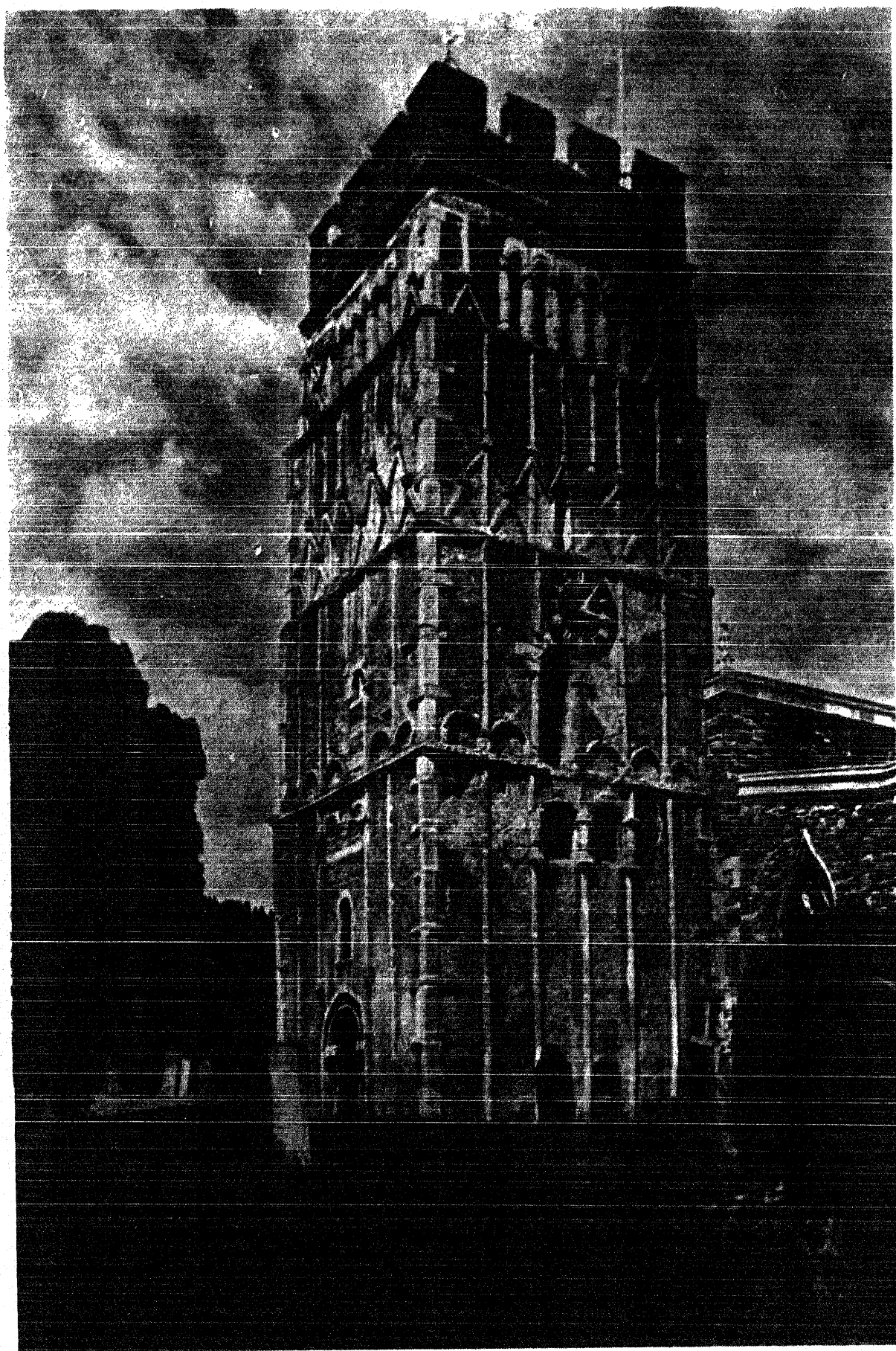
サクソン塔とその社会的背景

(三)細線壁柱——後期サクソン塔のうちには外壁面に一乃至二インチの厚さで浮き出ている平らな細く長い壁柱の認められることが少くない。これを木骨建築の名残りだと見做すものもあるが、北イタリアの<sup>(6)</sup>ロンバルディア式カンパニーレにもほど同様の壁柱が存在しているので、これを以て木骨を模したもののとみ解釈することはできない。カンパニーレの場合と同様、サクソン塔に於ても壁柱は構造上の必要よりは、むしろ多分に装飾的意味をもつものと見るのが妥当である。なぜならば細線壁柱を全く欠くサクソン塔の壁面は余りに単調で、殺風景なものとなるからである。第二図のアールズ・バートンの塔を見るとその多くの細線壁柱が如何に壁面を賑かに飾っているかわかる。

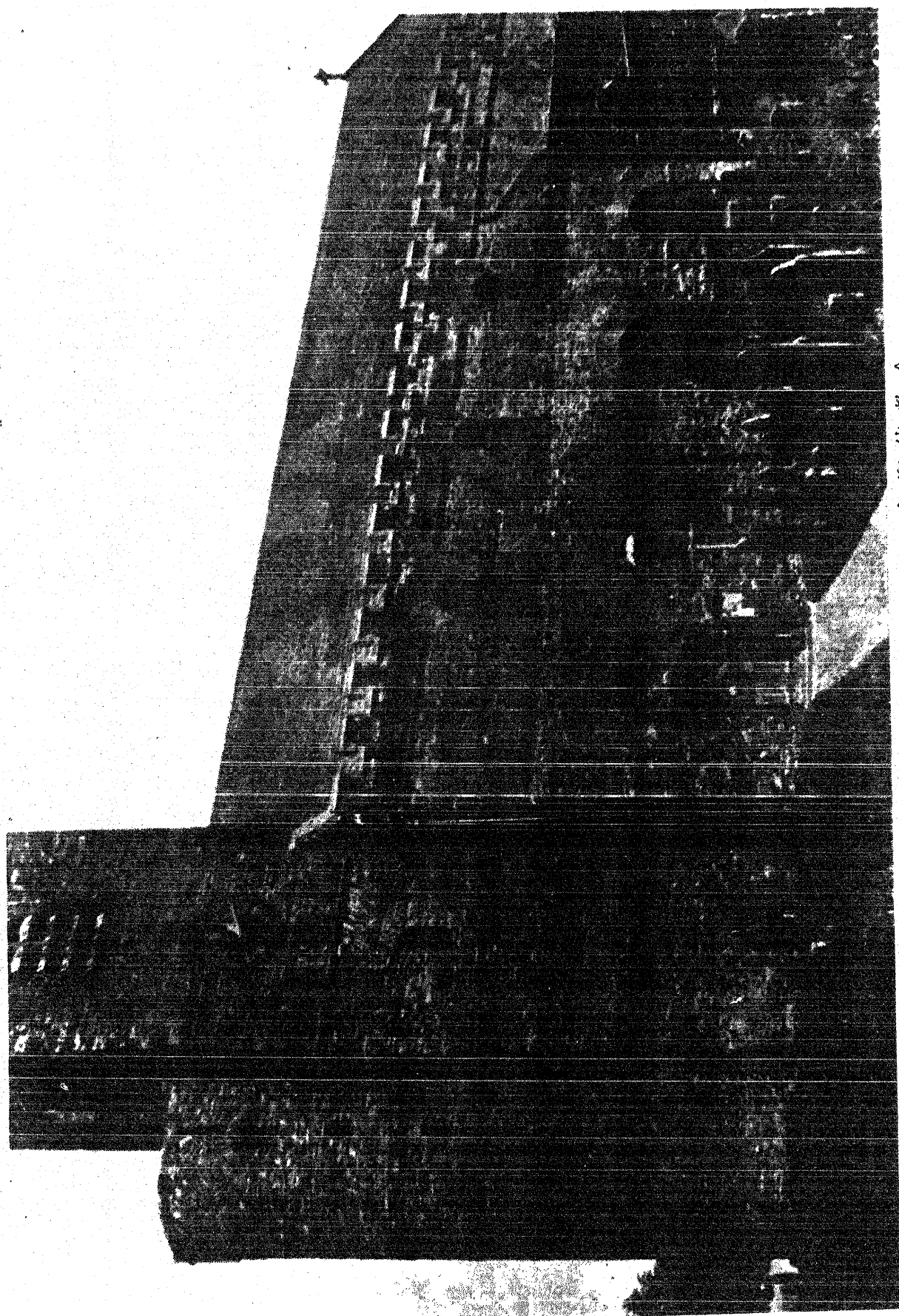
(四)水平の帯輪——イタリーの古いカンパニーレには塔の外壁に幾条かの<sup>(7)</sup>胴蛇腹を設け塔身を幾つかの階層に区画すると共に水平の線を強化しているものがある。これと同様にサクソン塔に於ても垂直の細線壁柱のほかに水平の帯輪(plain bands or strings)を以て塔身を囲み、これを幾階かに仕切っている場合がある。第二図では一、二、三階の上部にはつきりとこの種の帯輪が見られるが、第一図ではこれを全く欠いて、窓の配置によつてのみ階層が窺われるに過ぎない。

(五)内外等斜面の窓——後期サクソン建築の最も特徴的な様相の一つは窓の内外両側の抱に等しい傾斜度の隅切りのしてあることである。<sup>(8)</sup>プレイヤーによるとこの内外等斜面の窓(double-splay window)がイギリスの教会に見られるとき、それは一〇乃至一一世紀のサクソン工作のものであることの決定的証拠となると云う。アールズ・バートンの塔の二、三階の窓もその一つのよき例である。

(六)窓の抱石と拱基——塔の戸口その他の開口部の抱は長短積が最も普通であつて、その下には拱基(impost)の置かれていことが多い。この拱基は頗る粗野で甚しく重厚な切石であつたりする。



第二図 アールズ・バートンの塔



第三圖　ゴリクスワースの全聖徒教会

(4) 帶入り手摺子式短柱——窓、特に鐘の吊してある階層の窓は、徳利のような形をした手摺子式短柱によつて、二連、三連またはそれ以上の連窓に仕切られている。しかもそれらの短柱には粗雑な線形の帯がとり巻いてゐることがある。アールズ・バートンの塔の最上階たる鐘室の窓(第二図)にはこの種の短柱が各面六本ずつ設けられて頗る賑かな様相を呈している。

以上は以れも、一〇乃至一一世紀のサクソン塔の外観的特徴の主なものを略記したに過ぎないが、もちろんこれらの特徴の全部がある一つの塔に見られるというわけではない。たゞサクソン塔の大部分が以上諸特徴の少くとも一つ或は幾つかをそなえていて、それによつてこの期の塔を他の多くの塔から区別しうることを示したまでである。

サクソン教会にはブラドフォード・オン・エーボン、エスカム、<sup>(9)</sup>バーフレイストーンなどの教会のようにはじめから無塔のもの、或はワースその他の教会のように後世になつて塔の附加されたものも少くない。もちろん一千年近い年月を経た今日初建当時そのままのサクソン塔を見ることはできないが、後世の改造又は修理を経たとはいえ、ほゞサクソン時代の姿を伝えている塔は私の調べた限りに於ても二七基に及んでいる。今その全部について説明する余白がないので、最もよく保存され、かつ建築史上注目されている数種をとり上げて解説的記述を試みることにする。

#### ④ バーナックの塔

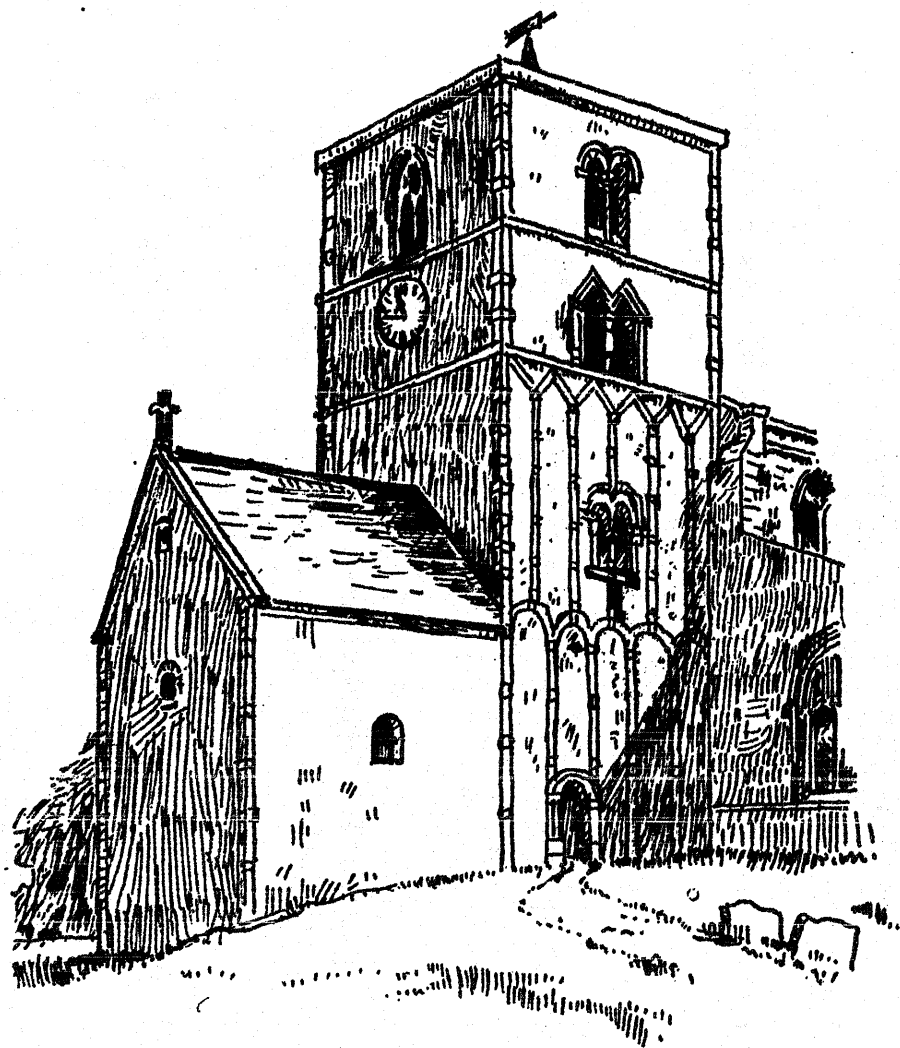
北方系サクソン建築を多く遺存するノーサンプトンシャーには特に注目すべき三基の古塔がある。その一つはバーナックの洗礼者聖ヨハネ教会に所属し、一〇世紀中頃に建立され、長短積、細線壁柱、水平の帶輪、羽目に刻まれたアカンサス葉飾などに於て著しくフランクのカロリング王朝建築の影響が見られる。これは他の多くのサクソン塔と同じく教会の外陣西端に位する西塔であるが、鐘階とその上のゴシック式尖頂は共に後世のものでノルマン期から初

英期への過渡的様式を示している。

⑧ ブリクスワースの塔

ロマネスク建築の研究家 A・W・クラファムが「アルプス以北に遺存する七世紀の最も堂々たる建築的紀念」と称したブリクスワースの全聖徒教会は、第三図の写真でみてもまことにすばらしい。この教会は四柱間の側廊のあるバジリカ風の建物として六七〇年メデシヤムステイード（後のピーターバラ）の修道僧達によつて建てられた修道院教会であつた。切石、ローマ・ブリテン時代の煉瓦及び粗石を材料として築かれたこの教会は九世紀にデーン人の攻略によつて初建の側廊、玄関の南北両部分及び外壁を失ひ、今写真に見られるように長くて細い外陣を露出するに至つた。（写真に見える軒の鋸壁はもちろん後世の附加である。）上方の明層クレアストリーと下方の列拱は壁で充填されてしまつたが、もとはその外に側廊があつたわけである。また外陣の西端はもと二階建の玄関ポーチであつたが、のちにこの玄関を下層部とする塔が作られ更にその外の西側に半円筒の小塔が設けられた。この小塔の中には螺旋階段が含まれている。高い方形塔の二階以上は後世の増築であるから問題外として、それ以下の部分は、初期サクソン建築の特徴をよく發揮する貴重な資料である。殊に二階には外陣を見下すことのできるいくつかの窓があり、最下部の玄関であつたところにはローマの煉瓦で作られた半円迫持の大きな広い拱路アーチウェイがあつて、そこから外陣に入ることができるようになってゐる。このような構造の塔は外陣塔（nave-tower）と呼ばれ、またこうした塔と連結している外陣は塔外陣（tower-nave）と名づけられている。それらは結局塔の下部が教会の外陣へ通ずる玄関になつてゐるものを指すのであつて、<sup>(1)</sup>バートン・オン・ハンバー（第四図参照）やアールズ・バートンの塔も同様に外陣塔と見做すことができる。

⑨ アールズ・バートンの塔



第四図 バートン・オン・ハンバーの塔

持、多くの細線壁柱、長短積、西側入口のアーチの彫形、第三階の合掌迫持の小窓、南側の陸迫持の上及び横にある小さな十字架の浮彫などが注目しに価する。けれども多くの学者によつて論議されている問題は、この塔の外壁面を飾る細線壁柱が果してイングランドの伝統的木造骨組構造のなごりなのか、或はラインランド地方の建築に於ける木造か

アールズ・バートンの全聖徒教会は一一世紀の末及びそれ以後の改修で、かなり原形と変つてゐるが、その西塔だけは、屋上の鋸壁と南側外壁にはめこまれた時計など近世の変更を除き、九三五年の初建当時と大差のない様相を呈している。そのため建築史の上ではサクソン塔の最も完全な見本とか、イングランドに於けるこの時代の最も注目すべき建築的記念であるなどと云われている。しかし恐らく初建当時は切妻屋根であつたと思われているのに、それが鋸壁をめぐらした平頂屋根とされている現状は面白くない。この塔の最も著しい特徴としては鐘階の帯入り手摺子式短柱で仕切られた五連窓とその上部の半円迫

ら石造への変化の過程がそのまま移入されて、その影響が現われたものかということにある。もう一つ注意すべきはこの塔の一階が教会の聖器保管人の居室として使用され、その室には地上から高い所に作られている開口部に木製の梯子をかけて昇り、更に聖器保管人はこの塔の東壁に開かれた幾つかの窓から常に教会の見張りをしていたと考えたクエンネル夫妻の推定が果して正しいか否かということである。これはほぼ同時代に多く建てられたアイルランド円塔の用途に関する問題にも触れて考察されるべき興味深い課題となると思う。なお既述の如くこの塔が鐘を鳴らし、礼拝の時刻を知らせる目的を以て建てられたことは鐘階の構造の上からも、また考古学者の意見によつても間違いない所であろう。<sup>(13)</sup> モリスによると現在この塔には一二cwtの最低音の鐘を含む八音程一組の鐘がそなえられているという。

# ① ソンブティングの塔

イングランドの南東部にもサクソン塔が遺存しているが、その数は北方に於ける程多くはない。サセックス州ソンプティングの聖マリア教会の塔はライン兜 (Rhenish helm) とか、ラインランド尖頂 (Rhineland spire) とか呼ばれる特殊の屋根を頂く現存唯一のサクソン塔である。急勾配のピラミッド形屋蓋の四つの棟はそれぞれ破風の頂点に連なり、又ピラミッドの四面はそれぞれ塔の外角のところまで降下してまことに面白い構造を示している。もちろんタイル葺きの現在の屋根は初建のものではないが、形式はもとのまゝであつて、<sup>(14)</sup> プレイアーによるとケンブリッジの聖ベネディクト教会の塔、その他多くのサクソン塔の屋根も最初は同形式のものであつたろうとのことである。次にソンプティングの塔とアールズ・バートンの塔とを比較してみると前者は後者より遙かに単純でしかも落ちついた面持のあることがわかる。それは特に塔壁に現われた細線壁柱と帯輪との数及び配置に著しい相違があるからである。ソ



第五図 ソンブティソグの塔

ンプティングの塔では四つの壁面のそれぞれ中央を下から上へ走る一本の壁柱があるだけで頗るさつぱりしているが、それが却つて高さの印象を強化している。また帶輪も比較的低い所に細く一本だけ見られるに過ぎないから別に水平線を以て高さの感を減殺するほどのことはない。これに反してアールズ・バートンの塔では垂直及水平の細線が賑やかに浮き出しているばかりではなく、更に短い細線を以て半円（二階）及び合掌（三、四階）の列拱を作り甚だ複雑である。同様のことは両塔の窓についてもいえる。すなわちソンプティングに於ては手摺子式短柱を並べた大きな五連窓の如きはなやかなものではなく、極めて簡素で小さい合掌及び半円迫持の窓が見えるに過ぎない。このように共にサクソン塔でありながらこの両塔はまことに著しい対比をなしている。

最後にサクソン建築、特に教会とその塔、の遺存しているものを観察し、またビードの記述やアングロ・サクソン年代記の記事をはじめ現代の歴史家、建築家などの見解を参考にして建築に現われたサクソン人の性格を推定してみると大体次の諸点（重複するものもある）が挙げられるのではないかと思う。

- (1) 粗野で勇敢
- (2) 野蛮で強い飲酒家、知能は高くないが辛棒強い。
- (3) 本来の水夫的生活様式を捨て、熱心な農民となる。
- (4) 王公に対してはよき臣下ではなかつた。常に自己の権利を主張し、権威に抗してこれを疑つた。各村落はかなり自給自足的で、七世紀の初め頃キリスト教に改宗するまでは自分の隣人から殆んど、また何事も、学びとろうとしなかつた。

(5) 初期の建築は一般に木造であり、その現存するものは殆んどないが、しかし建築上とるに足るようなものは大してなかつたようである。彼等の残した建築的遺物は未発達、の粗野、という言葉で最もよく表現することができる。

(6) サクソンの工作の痕跡を多少とも示す建物の現存するものは約七〇〇点にも及ぶであろうが、その様式は何れも一般的な粗野と、細部の疎略を示す。けれども他面ではまた堂々とした威厳も窺われる。

(7) サクソン人はケルト人に比べて審美的資質が劣っている。彼等には材料、形態、装飾及び対象の効果などの統合調和の念が殆んどなかつた。

(8) 比例の觀念や芸術に於ける数学的要素についての感も幼稚であつた。

(9) 古くからケルト人を一種の芸術家たらしめていた特徴、即ち線を巧みに馳使する力、をサクソン人は殆んど全く欠いていた。

(10) サクソン人は決して技術家ではなかつた。組み立て、作る構造のうちに存続していなければならぬような迫力の作用に敏感であつたらしい様子は少しも示さなかつた。

(11) 彼等はまた、一方では必要に応じて力を集中し、他方ではそのまゝ手をつけずに納めて置くより仕方のないような場合に材料を節約するゴールの本能をも欠いていた。

(12) サクソン人の建築は簡単な箱のようなもので、その形態、充実性及び目的の三者の關係について巧妙であつたためしは殆んどなかつた。

(13) 一〇世紀頃のサクソン建築家は細部の仕上げという事には全く不向きであつた。また彼等は一般の構造に於て巨石使用法を固執することによつて一種の莊重性を示したが、それも材料が欠け、建築家の想像力の乏しい場合にはい

つ退歩して単なる武骨に墮してしまふかわからないようなものであつた。

(14) 古代ゲルマン系民族の一部について観察したローマの歴史家タキトゥスが「彼等は森や平原或は新鮮な春の魅力が引きつけるまゝに各自勝手に離れて生活する」性質を持つと云つたそうであるが、この性質はアングロ・サクソン時代以来今日に至るまで常にイギリス人の特徴をなし、彼等は市民の誇りを殆んど持たず、田舎を愛する念が常に強いと見られている。

以上列挙した諸性質が果してサクソン人に共通する真の特徴であつたか否かは暫く別問題として、少くとも歴史及び建築に関するイギリスの著者達が述べたサクソン人に対するこれらの評言を念頭に置いて再びサクソン建築の実物を見て廻るのもまた興味深いことであろうと思う。

註(1) 佐原六郎 塔の研究(昭二四)第五部、八、「円塔と牙城又は宝庫」四四九頁以下参照

- (2) Quennell, Marjorie and C.H.B., *Everyday life in Roman and Anglo-Saxon times*, 1959. p. 191. Bede, op. cit., p. 204.
- (3) Rev. Gatty, A., *The bell, its origin, history and uses*, 1848. p. 14.
- (4) Morris, E., *Towers and bells of Britain*, 1955. p. 222.
- (5) St. Michael, Oxford.
- (6) 佐原、前掲 三三五頁
- (7) 佐原、前掲 三三三頁
- (8) Blair, P.H. *Introduction to Anglo-Saxon England*, 1956. p. 189.
- (9) St. Nicholas, Barfreystone, Kent.
- (10) Clapham, A.W., *English Romanesque Architecture before the Conquest*, 1930. p. 33.
- (11) St. Peter, Barton-on-Humber, Lincolnshire.

- (12) Quennell, op. cit. p. 189. f.
- (13) Morris, op. cit. p. 103.
- (14) Blair, op. cit. p. 189.
- (15) St. Benedict, Cambridge.

(本稿は昭和三十二年度後期の慶応義塾学事振興資金研究補助を受けて行つた英国造塔史研究の一節として執筆されたものである。また、第一第四の二つの絵図は文学部副手山岸健君を煩わして画いて頂いた。ここに深く感謝の意を表する。)